

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）  
分担研究報告書

遺族に対するうつ病予防介入開発

研究分担者石田 真弓 埼玉医科大学国際医療センター 精神腫瘍科  
(臨床心理士・公認心理師・准教授)

研究協力者大西 秀樹 埼玉医科大学国際医療センター 精神腫瘍科  
(医師・教授)

伊丹 久美 埼玉医科大学国際医療センター 看護部  
(精神看護専門看護師)

研究要旨 本研究は、埼玉医科大学国際医療センター精神腫瘍科「遺族外来」を受診したがん患者遺族を対象に実施された。がん遺族の経験するストレスなど心理学的特徴を踏まえて開発した抑うつ改善およびうつ病などの疾病予防を目的とした心理教育を中心に構成されたプログラムを用い、遺族の抑うつ改善については PHQ-9 をメインアウトカムとし、サブアウトカムで心的外傷後成長を設定し、解析を行った。その結果、本プログラムは、抑うつの改善にとどまらず、その後のポジティブな結果である心的外傷後成長をもたらす可能性が見出された。その他、遺族の精神面に影響を来す身体的な問題についても明らかにした。

#### A. 研究目的

埼玉医科大学国際医療センターでは「遺族外来」を設置し、これまでに 370 名（2020.03.07 現在）のがん患者遺族を診療している。遺族外来の研究から、悲嘆を主訴に受診した遺族の約 40%は初診時うつ病に罹患していること（Ishida et al., 2011）、がん患者遺族に特徴的な苦悩として「後悔」（71%）、「周囲からの言葉や態度」（67%）、「記念日反応」（62%）などがあること（Ishida et al., 2012）を報告している。死別後、新たに経験する「記念日反応」と「周囲とのコミュニケーション」（Ishida et al., 2018）は、遺族の新たな抑うつの原因になりやすく、心理教育プログラムとして予防的に対応することでその抑うつを改善させる可能性がある。がん遺族への支援を多くの医療機関で相互補完的に取り組むことの必要性から、遺族支援プログラムを開発は急務といえる。

よって本研究では、がん患者遺族を対象にうつ病予防を念頭においた、抑うつ改善プログラムの

開発を目的とする。

#### B. 研究方法

埼玉医科大学国際医療センター精神腫瘍科遺族外来を受診したがん患者遺族のなかで配偶者を失った者を対象に、その精神・心理学的特徴を明らかにする。さらに、その特徴を踏まえたプログラムを作成し、抑うつ改善を目標とした介入の効果を確認する。プログラムの効果検討については、これまでの介入データをもとに解析を行う。解析のメインアウトカムは抑うつとし、サブアウトカムは心的外傷後成長とする。

#### C. 研究結果

研究期間内に遺族外来を受診した 114 名を解析対象とし、配偶者を失った 73 名に対してプログラムの介入と質問紙調査を実施した。ただし、初診時にうつ病と診断された 11 名については、薬物療法を開始したため研究対象から除外した。よって、研

究対象者を 62 名とし、各遺族のデータについて、年齢・性別などの基本情報、死亡した患者の情報から診療録から抽出、質問紙への回答によって得られた上記データと、受診回数（1 回、2 回の診察を受けた者も調査対象として含む）についてのデータベースを作成し、それぞれの抑うつ(PHQ-9)、心的外傷後成長(PTG-IJ)について結果解析を行った。解析では初診時と終診時のデータが得られた 27 名が主な対象となった。初診時の PHQ-9 は 12.41(SD=6.435)、終診時は 8.37(SD=6.698)であり、t 検定の結果有意な改善が見られた( $t=3.872$ ,  $p<0.001$ )。また、心的外傷後成長については、検定で有意差はみられなかったものの、「他者との関係性」「新たな可能性」「人間としての強さ」「精神的変容および人生に対する感謝」のそれぞれの項目について点数が高くなっていた。

#### D. 考察

本研究結果から、遺族に対するプログラムは抑うつを改善させることが明らかになった。本プログラムは、これまでの知見から得られた心理教育プログラムを中心に構成されており、がん遺族の特徴的な心理的苦悩や認知の修正をその主体としている。遺族の状況を問診等で十分に把握し、その問題点を特定、がん遺族に特徴的な問題がその精神・心理症状に影響していると考えられる場合には本プログラムを用いた介入を検討することがよいだろう。また、心的外傷後成長については、抑うつの改善後に生起することが予測され、今回の研究対象となった遺族については有意な改善がみられなかった。ただし、いずれも数値としては改善している可能性を有しており、今後も長期的なフォローあるいは症例数を増やした解析を行いその効果を確認していく必要がある。

#### E. 結論

引き続き、がん遺族を対象としたプログラムの効果検討を行っていく。

#### F. 健康危険情報

なし

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

1. Ishida, M., Mizunuma, N. & Onishi, H. (2021). [Problems Faced by the Families and Bereaved Families of Cancer Patients]. *Gan To Kagaku Ryoho*, 48(5), 621-626.
2. Ishida, M. & Onishi, H. (2021). How Can Documentation of Caregivers Offer More Than One-Way Care by Health Care Professionals? *J Clin Oncol*, 39(28), 3188.
3. Ishida, M., Uchida, N., Itami, K., Sato, I.,

Yoshioka, A. & Onishi, H. (2022). A case of Wernicke encephalopathy in a dementia caregiver: The need for nutritional evaluation in family caregivers. *J Gen Fam Med*, 23(2), 104-106.

4. Ishida, M., Uchida, N., Yoshioka, A., Sato, I., Hamaguchi, T., Horita, Y., Mihara, Y. & Onishi, H. (2021). Wernicke encephalopathy in a caregiver: A serious physical issue resulting from stress in a family member caring for an advanced cancer patient. *Palliat Support Care*, 1-3.

##### 2. 学会発表

1. Kumi Itami, Hideki Onishi, Mayumi Ishida. Cancer bereaved care: mental illness and notable thiamine deficiency. (Poster\_17-3). The 22nd World Congress of Psycho-Oncology and Psychosocial Academy. May 26-29, 2021. (virtual)
2. Nozomu Uchida, Mayumi Ishida, Hideki Onishi. A Case of Wernicke
3. Encephalopathy Prior to Cancer. (P07-2). 14th Asia Pacific Hospice Palliative Care Conference (APHC2021). November 13-14. (virtual)

#### H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得  
なし
2. 実用新案登録  
なし
3. その他  
なし